阿部知二全集

第9巻

阿部知二全集

第9巻

河出書房新社

阿部知二全集　第9巻

一九七五年二月十日　初版印刷
一九七五年二月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話(〇三)二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

捕囚 …… 5
解題 …… 榎林哲 …… 335
解説 …… 小田実 …… 342

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

阿部知二全集　第9巻

捕

囚

第一篇

序章

戦争が終わって五年たったころ一つのふしぎな文章があらわれた。よく知られぬ小評論雑誌の片隅に匿名の筆者によって書かれたものだったが、たちまち多くの人をさわがせるという結果を生んだ。

そのようなことになったのは、それが園伸一という高名な人物のことを書いていたからにちがいなかった。彼は二十年間ほどにわたって、この国の主として知識人・青年たちのあいだにきわめて大きな影響をあたゝた哲学者・評論家だったが、戦争の末期に、ひそかに共産運動に同情してそれを助けたという理由で検挙投獄され、戦争が終わっても一月あまりもそこに置かれたまま病死したのであった。そのことが当時の社会を衝撃しないはずはなかった。園伸一の死という事件は、ただ知識人や学生などの間だけでなく、はるかに広い層にまで強い響きをもってつたわっていった。はげしい悲しみと憤激との声がわきおこった。彼は理不尽で残酷な戦争によって、ありもせぬ言いがかりを官憲によってつけられて獄死するにいたったところの、もっとも痛ましく良心的な殉教者であるとする声が圧倒的だった。この死によって、戦後まだ牢獄に置かれていた多くの政治犯の釈放が促進された。

あらためて彼の学識や思想についての関心と尊敬とが高まり、彼の本は、代表的論文はもとより、小さな感想集のようなものにいたるまで争って読まれた。その獄死後一年もたつと、きわめて困難な出版事情にもかかわらず、有力な出版社によって完璧を期した全集が刊行されることにもなった。また、彼の心が複雑で深かったことや、彼の教養がゆたかで人柄が高邁であったことなどについて、生前に彼を知っていた多くの人びとが書き、それを多くのものが熱心に読んだ。こうして園伸一は、神格化されたというのは誇張の言だとしても、この近代の日本が生んだもっとも重大な人間像の一つとして歴史に残ってゆくであろうということに疑いは持たれなかった。

ところで、あの小雑誌に出た一文章は、そのような崇敬の感情・思想の熱狂的ともいうべき燃えあがりにたいしてさらに一つの力を加えた、というのではなかった。それが社会の多くのものをさわがせたというのは、逆に、きわめて冷やかに一石をその熱狂のただ中に投げこんだからであった。つまりその文章は、園の死をいたみ思想と業績とをたたえつつ軍国主義にいきどおりを発した人びとが考えた

ようなものとは、まったく正反対の性質をもった人間像を、まちがいもなく園の真実の姿だとしてしめしたのであった。それによるならば、彼は高貴悲壮な殉教者どころではなかった。まったく醜悪な男であり、それどころか邪悪な男であったともいえそうであり、よしんば一歩しりぞいて同情をもって見たとしても、まったくあわれむべき、奇怪で滑稽ですらある矛盾だらけの男ということが語られていた。

それは比較的短い文章であった。園伸一の、ある一時期——戦争のはじめのころに彼が徴用令の強制によって陸軍の「宣伝班」というものに組み入れられて南方の一地方に送られていた一時期の生活を、断片的に描いたものだった。そこに彼にたいする反感憎悪の情がむき出しにあらわれているのではなく、また暴露趣味をたのしんでいるというような軽薄なところもなく、だいたいのところは、淡々とした筆づかいで事実を事実として記述するという形だった。それだけに、いっそう効果的だったといえるかもしれない。

その「宣伝班」には、園のほかにも、ひじょうに有名な、そして年齢も彼とそれほど変らない作家が一人いたが、園はその作家にたいして反感をもった、——というよりは彼を蔑視しようとし、また彼が軍民に人気があるのに嫉妬した。そして、自分のところへ近づいてくる若い班員たちを使って、彼とその仲間の幾人かのやはり有名な作家たちの行状について、あること無いことをいいたてて中傷した。一方では自分が彼らによって中傷されているといって嘆き悲しんでみせた。

戦争する軍人たちという彼とはまったく異質なものが構成する社会集団の中に突如として投じられた園は、あきらかに心の安定を喪失してしまっていた。あるときには、班の仲間たちを相手に、この戦争は理念的にまちがい方法的に拙劣をきわめていて、軍人とその取巻きどもが大まじめになればなるほど、滑稽な道化芝居の様相を呈しながら、結局、遠くないうちに決定的に敗北をこうむることになる、と目をむき口から泡をとばすようにしながら、大声で一気にまくし立てたりした。その席に彼と親しくしていない人間が交っているかもしれぬという危険な事実にも気をとめていないようであった。しかし、その数日後に出る軍隊向けの小新聞には、整然とした義戦の論理が彼の名によって書かれたりしているのであった。比較的親しいものが、その矛盾についてたずねてみたり、あまりあからさまに敗戦などと口走らぬほうが安全でないかと再考をもとめてみたりすると、あの時は暑苦しい上に体に熱もあって興奮しすぎていたようだった、といった。しかしその弁護につづけて、また軍人たちをののしったりした。

班には、作家、評論家、映画人、写真家、その他ジャー

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ナリストなどがいたが、園は知らぬ顔をしながら鋭く彼らを邪念をもって観察していたにちがいなかった。たとえば彼らの多くが、戦時下で物資が不足している日本からきて、この西洋資本主義国の植民地の都会のさまざまな物資に眩惑されて買いあさっているのを、軽蔑をこめてその浅はかさをあざけり、また無用のもの、そして内地へ運ぶことも不可能な嵩張ったものを手に入れてよろこんでいる愚かさをあざ笑うのであった。しかし、いつのまにか彼自身が、ひそかにひとりで街を歩きまわって、綿布、シーツ、毛糸、テーブル掛け、靴、時計、その他のものを多量にあつめて、二つの巨大な古トランクにしまっていることを、ある時に一人の友人に発見されてしまった。というよりも、それは、見せびらかし羨ましがらせようとしたのかもしれなかった。そうかと思えば、班員たちが宣伝班長の中佐をかこんでいたときに、

「きみたちは戦地へ買い物にきているのか。ガダルカナルでは戦況不利だと聞いてはいないのか。おまけにきみたちは酒色におぼれているそうではないか。夜の巷は酔漢であふれ、曖昧屋は満員だというではないか」と大声を発した。

他の時には、仲間にむかって、国際性病にかからぬようにしろとからかい半分に忠告しながら、自分はこの宿舎の窓からちょうど見える売笑窟をのぞいて手淫することによって性欲を処理しているのだ、と自らの合理的処置をほこった。合理性といえば、故国で家族が生活に困っているのではないかと心配する仲間があったとき、自分がいかにして出版社等から金を出させて家の安全をはかっているか、しかしその一方で自分だけの自由になる金を家族にかくして保留することを昔から実行してきたかを、こまかく実例をあげて説明したりした。

班長の中佐が他に転任することになった。園は、あのような愚鈍無能な男が飛ばされてゆくのは遅きに失したほどだと、だれかれに向ってかたった。送別会には、園が班員を代表して挨拶するのが、年齢、有名度などからいって順当であったろうが、班員は彼が中佐を面罵するのを危ぶんで、一人の年取った牧師に、――年齢の順序ということで――その役を振りあてた。その牧師の穏当で平凡な言葉が終わり中佐がそれに答えて、これも平凡な言葉で自分の非力を詫びたとき、園は、自分に一言いわせて下さいといって立って、みなをおどろかせ、心配させた。しかし彼は、「……これだけ毛色の変わったものが寄り合う班を一糸乱れず統率し測り知れぬ業績を残し得たことは、ひとえに班長の円満にして高邁な人格によるものであります」というように高声をあげてのべた。中佐は頭を垂れ涙をながしていた。園の目は怒るように笑うように燃えかがやいていた。

その上半部は凹凸に富み下半部は円くふくれた黒い顔は、獲物をもてあそぶ何かの怪しいけもののそれのようにも見えた……

かいつまんでいえば以上のような内容をもつ文章が発表されたとき、人びとの中にさわぎがおこったことは当然といわなければならなかったが、その反響もしくは衝撃がさまざまの種類の性質のものだったことも、この場合特徴的であった。まず、心から憤慨して、これを絶対に許し得ない悪徳の行為であるとする声が圧倒的に大きくわきおこった。しかし、そのうちにこれは我が意を得た指摘であって正当で愉快なことであるというような声がどこからとなく小さくひびき、そのうちそのような声はしだいに大きくなる傾向すらあった。もちろん、大体から見て、激怒の声は進歩派の側から、賛意を表わす声は保守派の側から出たのであった。前者は、戦後数年で早くももっとも悪質の反動の力が頭をもたげはじめ、その手はじめの、もっとも卑劣残忍な血祭りとして、この文章によって園伸一をそのいけにえとしたのであるというのであった。いうまでもなく、園は完全無欠の人格であったのではないとしても、しかもここに書かれたことは、ほとんど虚偽によってみたされた邪悪な誹謗であると断定した。これにたいして、この文章に喝采をおくった人びとは、進歩派の人間などというものは、まさにこの園伸一において見るように、本来その性格に異様な歪みと欠陥とをもつものであり、そのような種類の人間を無条件に尊敬するものたち――主として知識人や学生たちは、単純、愚鈍、未熟、浮薄であるというほかなく、したがって彼らの進歩思想なども憫笑にあたいするものでしかない、というように断定した。

このようにして、はっきりとした二つの立場の対立――つまり、この文章は根拠もないことを書き立てた誹謗であると考えようとし、あくまで園の名誉を守ろうとするものと、この文章の真実性を信じ園や彼に類するものたちの人間と思想とへの不信感を強く表明するものとの対立が、いちじるしく目立った。しかし、それだけではなかった。すこしこまかく注意して見ると、その中間に、いわば灰色のいくつかの層もあることがわかるのであった。たとえば、この問題についてはしばらく判断停止の立場をとろうとする人びとがあった。彼らは主として園の先輩または同輩というべき年ごろの人びとであって、この日本の知的な代表者であると少くとも自分では任じているような教授、思想家、文学者、ジャーナリストたちであった。彼らは、このような醜聞事件にかかわることは自己の品位をきずつけるものだと考えたかのようであった。何らかの距離をおいたところから無関心の態度をとりながら、ことの推移を静観

しようとした。彼らの多くは生前の園とは近いところに位置をしめて、そのうちのいくらかは、多かれ少かれ親しくしていたのだから、あるいはひそかに強い興味をもってこの文章を読んだのだったかもしれないが、人に感想をもとめられたりした場合には、読んではいないというような口ぶりをしてみせるとか、ただ黙って眉をひそめて見せるとか、はしたない空さわぎにすぎないと吐きすてるように断定するとかするのであった。中には、かなりはげしい語気で、園のために憤激していると公言するものもあったが、ともすれば、語りながらの目や口もとの表情には、

「……園君には部分的にはそういう性格もあったとはいえる」というような意味を、それとなく暗示するような色合がほのめいていることもあった。

それらに較べるならば、同じく灰色の判断停止といっても、より若い世代のものたち——たとえば三十代あたりの一般知識階級のものとか、二十代の学生たちとかがしめした反応は、より一本気で真率だったといえる。彼らは冷ややかな態度などは取り得ず、いずれかに判断をしなければならぬと思うのだったが、その判断のよりどころも発見できぬままに、悩み、迷い、そして苦しんだ。あるものは大きな幻滅を感じ、そのために、自分はこののち思想的な問題の追究をする意志をうしなってしまうのではないかと恐れたりした。また、あるものは、いつ見つけたのか「ひきがえるは醜く毒々しいが、その頭の中には宝玉を蔵している」というようなシェイクスピアの言葉を引いたりして、たとえば人間としての園伸一には幻滅を感じるとしても、彼がわれわれに告げる思想、そして、思想というもの一般については、断じて信頼をうしなってはならないのだ、と苦しげにではあるが誓うのであった。

いずれにしても、死後五年足らずして園伸一という一個の人間像には、ぬぐい去りがたい泥がぬりつけられたという感はまぬがれなかった。しかし、ふしぎな現象がそこに見られた。それは、彼がのこした著作を読むものの数がいささかも減少しなかったということである。全集も予想外といわれるほどの予約者をあつめた。人びとの中には、あの文章の出現そのものによって読者はいちじるしく増加したのではないかと首をかしげるものすらあった。そして、これには、世の好奇心の作用ということもあるとしても、そればかりでなく、受難者園の思想の測りがたい複雑さと深さとが、この事件を契機として積極的に立証されたことをも意味するのではないか、というものも出てきた。

さらにふしぎなことがあった。それは、この文章が匿名によるものだということにかかわっていた。いったい匿名というものは、ほとんどの場合——というよりは、すべて

の場合といっていいほど、――現代のジャーナリズムの世界では、人びとにその心さえあれば、執筆の当人を突きとめることはできるものなのだが、これはおどろくべき例外の事件となったのであった。問題が問題であっただけに、きわめて熱心に執拗に容疑者を探りだそうとするものが数多くあらわれ、さまざまな推定がなされた。例えば、園と同じ軍の宣伝部隊に組みこまれて南方へ送られた評論家とか映画関係者とか作家とかのうちの何人かが、まず取りあげられ、そのひとりひとりがきびしく検討され、一時はほとんど決定的とされた人物もあった。しかし、ただちに多くの反証があらわれて、容疑は崩れてしまった。つぎには、その部隊に属していなくても、その南方の占領地に出かけていった新聞記者――つまり特派員、従軍記者たちにとっては、その職業的な感覚をもって、著名人である園について興味あることがらを嗅ぎつけ、それを自分の目で見たかのような文章とすることはまったく容易である、という説もあらわれ、ここでも何人かの記者の名があげられたが、最終的には、だれと決定することもできなかった。

さらに、その南方の戦地へはゆかなかった人間であっても、――つまり戦時中内地にいたとしても、帰ってきた宣伝班員や新聞記者や、あるいはだれかれの軍人――将校、下士官、兵士などからでも聞いて、あのような文章を作りあげることはできる、という想定もうまれてきた。そこで、ほとんど戦争とかかわりなく暮した人びと、とくに、学界や思想界などで園に近いところにいた人びとの中でかねて園に対して何らかの理由で敵意をもっていたようなものに、疑いがかけられた。たとえば、生前の園を、学問的または社会的な地位の問題などで、強く嫉妬していたものは、決して少くはなかった。しかし、この方面での探査の努力も、結局は、噂、疑惑という段階を越えて実体をとらえるということに成功できなかった。また、一人はかなり年を取り一人はかなり若いジャーナリストが、自分が書いたのだといって名乗り出たこともあった。しかし、それはいつわりであることが、ただちに判明し、これは、この機会を利用して、美名であれ悪名であれ何らかの形で名をなそうとする動機によったものでしかないとされた。また、意外に、もっとも園に身近なところにこそ、このような裏切者はひそんでいたのかもしれぬとして、彼を崇拝したり彼に愛されたりしたことで知られていた「弟子」というべきものの、あれこれにまで疑いは及んだが、そこにも具体的な手がかりらしいものは、何ひとつ発見できなかった。

このような状態の中で、園伸一の本は読まれつづけた。

1

わたくし「ナの一一八号」は、午後七時の鐘の音を聞き、視察口という、廊下にむかった小窓にむかって正座し、顔をわたくしには見せぬ看守にたいして、自分の番号をのべ、そののち、きわめて幅のせまい青い綿ぶとんの上に体をのばし目をとじたが、かなり長いあいだ――それが正確にどれほどの長さだったかはいえないが――眠ることができなかった。五月の夜にしては異常なほど暑い空気が、臭気をふくんだ湿気にとけこんで濃くよどみ、わたくしの体をつつんでじとじととぬらしていたが、体の底のほうでは、ときどき悪寒がするどく走って、わたくしを戦慄させていた。何度も目をひらいて、白い漆喰の天井と壁とを、夜どおし消えることのない裸電球の弱い光で、眺めるとなくながめていた。漆喰は、つめたく白らけた光沢を見せ、けっして熱気や湿気や臭気を吸収しようとしないような表面を見せていたが、そのくせに、いつのまにかそのようなもので芯の底まで汚されてしまっているようであった。また、塗られてから今日まで、一切の囚人の怨恨や悲嘆や絶望の感情を拒否し撥ねのけてきたようであったが、しかもその中にはそれらの感情のすべてが濃厚な層をなして堆積しているのが感じられた。

わたくしは、ほとんど毎夜このような状態におちいって不特定の長い時間のあいだ不眠と心身の苛立ちとで苦しみつづける。それでも苦しみのあげくには、きわめて浅いまどろみにおちいることはある。それから、これはまちがいなく毎夜、正確に判断はできないが、おそらくきわめて短い時間ののちに、ふたたび目をさます。今夜は、そのまどろみのあいだに二つの夢を見た。あるいは、夢というよりは、夢うつつの状態の中での幻といったほうが当っていたであろう。

わたくしは、そのてっぺんに目がとどかないほど高くのびた巨木のむれの下かげの草原にいた。その木々の、円形、菱形、針状、ひょうたん形、扇形、房状その他さまざまの深緑の葉のあいだから、測りがたく深い濃藍の空が見え、その天頂から白熱した火のような光線がみなぎってふりそそいできて、わたくしの目のまえの大きなガラスの建物の中へはげしい勢いで射しこんでいた。建物の中では、その光は純白な煙のようになって渦をまきつづけていたが、その底のほうでは、無数の色彩の焔の舌が絶えず明滅しているようであった。わたくしがはいってゆくと、瞬間に膚が焦げるような熱さを感じたが、しだいに涼しくなってきた。白い煙の中に明滅していたものは、花のむれであった。花は大小さまざまであって、楕円、唇形、円筒、じょうご、

舌の形、球形、紐の形、卵の形その他をしており、それらの花の一つ一つは、紅紫、青紫、黄金、純白、藍、橙、淡紅、深紅、灰、暗褐その他の色のいくつかを、縞目にしたり、斑点模様にしたり、幾重かの輪の模様にしたりして、それぞれに取り入れて自己をつくりあげていた。花全体は絶えず小きざみにふるえ、白熱した無数の光線を吸収し、またそれを放射し、その間に色は光線に化しながら、徐々にまたは急激に変色し、振動とともに、周囲にむらがる他の花々の色と反射し合い、相互の色を融合させ、また相互に色を取り換えつづけていた。「これは何だ、何の花だ」と、わたくしはいった。いつのまにか、かたわらに白いシャツを着た頭部も腕も脚も黒褐色に光る小男がきて立っていた。口をひらいて、なめらかな発声で、「これは、われわれの蘭の花です。われわれの宝石です。この国では、蘭は宝石であって、宝石は蘭です」といった。それから白い歯を出して笑ってみせて、「その中に女がいる」といい、花のむれの方へむけて、頤をしゃくった。わたくしは、光線と色との振動からくる強烈な眩しさに耐えながら、その方へ目をうつして眺めまわした。無数の花弁が重なり合ったあいだを、純白、淡黄、淡紅、暗褐などの、光と色とのかたまりとなったものが、頭部、首、肩、乳房、手、腹部、陰部、大腿部、足首などのような形になって、離れ離れに、急速に流れうごいて行ったが、それら全体をわたくしの目がとらえることは不可能であった。とつぜん、わたくしの背後でガラスが割れる音響が高くおこり、わたくしの体の中を寒気がするどく走った。

わたくしは、鳥のようにすばやく空気を切りながら灰白の氷の上を旋回していた。氷面全体は絶えず広くなったり狭くなったりしているようであった。狭くなったときには、周囲にある黒い針葉樹林や枯木林がみえ、その木々のあいだに雪の粉が散っているのもみえた。そこに、青い着物をきて黒いおかっぱの髪をした円い顔の小さな女の子がすわっているような心がしたので、停止して見つめようとしたが、旋回しつづけている子どもであるわたくしの軽く小さな体は、滑走運動をやめることができなかった。それどころか、速度はますます急になり、わたくしの足は、ほとんど氷面から浮きあがってしまっていた。氷面が広くなってゆくと、周辺は暗灰色の濃い氷雪の霧につつまれ、わたくしは目まいを感じながら何かの鳥のような叫びを立てて旋回滑走していたが、その叫びの意味は何であるか、はじめはわからなかった。暗い霧の中から光が射してきて、わたくしを取り巻いてつつんだ。わたくしはいよいよ急速度に滑走しながら、歓喜の叫びをあげているのだということを、自分で知った。そしてわたくしは、女の子が坐っている岸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo